



あごら

第四号

- あごらの会 -

真つ当な自我・歪んだ自我

松下 昌義

「人多き 人のなかにぞ 人ぞ無き 人 人となれ 人 人となせ」 この詩にいつ頃出会ったのか思いだせない。が、当時、若年の私には印象深く今も思いの内に息づいている。わたしにとってこの詩は「人である」とはどういうことなのか、という「問いかけ」であつた。

人は、人として生まれたから「人である」と思い安心していいのだろうか。身近で起こる人と人のあいだの残酷な事件。世界各地で起こっている人々の悲惨な争い。これらのすべては人が起こしている。それは決して他人事ではなく、いつ自分が被害者になり、加害者となるかも知れない。否、大事件でなくとも人は日常の人間関係に於いて、すでに加害者になっておりながら、自分が被害者に成つたと思うときだけ加害者の相手を非難攻撃し、自分勝手にさわぎたてているのかもしれない。動物の種のなかで、同種が殺戮し合うのは人間だけだと聞いているが、いったい、人（自分・人間）とは何者なのだろうか。

人は、善い意味でも悪い意味でも「ここまでやるか！」と恐ろしくなる。これが人であり人間の現実である。それほど「人であること・人間であること」の存在は深淵である。＼きれいご

と「や」たてまえ」ですまされないのが、人が生きるといふことである。

悪い意味での、「ここまでやるか!」という例を、特に新約聖書福音書の中でみるなら、その出来事の一つが、宗教的権力の独善と陰謀をもってローマ軍に引き渡し民衆の目前でイエスを十字架刑で惨殺したユダヤ教の宗教教団とその祭司達である。

今一つの出来事は、私的な不義を指摘した聖者バプテスマのヨハネの首を斧で切り落とし、外国の高官達との宴席で、その首をさらしものにした、ヘロデ王とその妻と娘らの酷薄とその非情さ。

これらの所業、イエスの場合は、律法主義（原理主義）的ユダヤ教とその神殿体制の権力維持のための独善と排他的な祭司達の宗教的エゴによるものである。

バプテスマのヨハネの場合は、まったくヘロデ王とその妻と娘達の個人の欲望と偽善的な権力行使のエゴによるものである。つまり、これらの所業の起因は全て「自我」にある。

一方、善い意味での「ここまでやるか!」という例を福音書に見るなら、その出来事の一つは、十字架刑で惨殺されながら、惨殺する祭司達等とそれに踊らされている人々のために「神よ、彼らをお赦しください。彼らは自分が何をしているのか気づいていないのです」と祈られたイエス。今一つの出来事は、山賊に襲われ、身ぐるみ奪い取られ瀕死の状態で倒れているユダヤ人を見て「あわれに思って駆け寄り」物心ともに最後まで助け切ったサマリヤ人。当時、サマリヤ人とユダヤ人との間には宗教的に敵対関係にあり、個人レベルに於いても完全にその交わりは断絶し

ていた。その徹底性は、互いに相手の土地には入らない。勿論言葉も交わさない関係であった。にもかかわらず、かのサマリヤ人は自分の商用のための旅であることも忘れ、また、宗教的、信仰的な関係も振り捨て、身に降りかかる危険も省みず、ただ、倒れているその者と一つになって、最後まで手厚く助け切ったのである。

イエスの場合も、サマリヤ人の場合も、その行為は安っぽい感情による演技的なヒューマニズムではない。また、宗教的、信仰的な教条的倫理や気分的な隣人愛などではない。これらの徹底的な愛の所業はすべて彼らの自我に起因する。

以上のように善悪に関わらず「ここまでやるか！」という所業を生み出すのが、私たちの「自我」であることを知っておくことは大切だと思う。

さて、人であるということとは心身的（人格的）に自我意識を持った存在である。そのような存在が人間であるという意味で、智者も善者も愚者も悪者も皆同じレベルに居る。

自我意識を持っているのが人間であるなら、それ自体は悪でも善でもない。むしろ、自我という意識は人間にだけ備わった神の賜物（創造に於ける自然）なのである。だから、「自我を捨てよ！」などと言うことを軽々に自分にも他人にも言ってはならない。自我を無くした人間は、もはや人格としての人間ではない。

人は「ただ動くもの」ではなく、言葉を持ち、考え、感じ、判断し意志をもって行動すること

で、さまざまな経験をして意識的に生きている者である。そのように生きている当の「われ」が「自我」である。つまり、「われ思う ゆえに われ有り」(ルネ・デカルト)という人間についての命題の「われ」のことである。その意味で再度言うが、人間は人格を持った自我的存在であつて、それ自体善でも悪でもない。

先に「自我の様態」について、「ここまでやるか！」という事件を福音書の中から二通り紹介した。何れも「自我意識」に起因する出来事である。

にもかかわらず、あたまから「自我は悪である！」と、決めつけ、痛めつけ、否定しようとするなら、その人の自我が未熟だからである。つまり、自分にとつて自我の何たるかを、良く弁えていないからである。特に「宗教信仰」に於いて怪々に「自我否定」とか「自己否定」とか「自分を捨てる」というような言葉が、美德として観念的に教会に定着しているように思う。しかし、そうした教条的に作られた観念信仰にはおおきな問題がある。

キリスト教の場合、例えば「わたしについて来たい者は、自分を捨て(否定して)自分の十字架を背負つて、わたしに従いなさい」(マタイ一六・二四)とイエスが命じられた言葉を「自我を捨て・自我を否定せよ」という命令言語だと解釈した信徒は、自分を押し殺し、愛に生きることが、神と人との前で義しく生きる人間の在り方だと固く信じ、ひたすら自己犠牲の生活に励もうとする。しかし、当人はそれで「なつとく」し不安や葛藤は全く無いのだろうか。ひよつとすると、自己犠牲に励む自分の姿に、ひそかな誇りと慰めを得て生きるナルシシズムの穴に落ち込

んでしまつてはいないか。又は偽善的なあり方に届直つて、本當の自然に属する自我に無感覺になつてしまつてはいないだろうか。善し悪しは別にして、教師や信徒に關係なく、そのような熱心で善良な信仰の人？がおおいでになり、当人たちは一向に、そのような自分に気づいていらつしやらないように思う。

大切なことなので、ここで先に言つておきたいことがある。それは、自我の問題は、その者の自我が充分に成熟することに於いて自覺的に生じて來ることであつて、未だ己が自我が成熟していないのに、自我の問題をことさらに持ち出し、「自我は悪だ！人間は罪人だ！」と軽々に教え込まれてしまふなら、その者は結局、自我の自覺も自我の克服も出來なくなる、ということである。

例えば、自我が未成熟のままの人が、「人間はすべて罪人ですよ！」などと、さも大真理を發見したように軽々に振りかざすのを聞くが、それは、その者の超自我が「そのとおりです」と簡単に認め大真理に気づいたように自我が思い込み、以後その者にとつて、それが一種の独善的な精神的な傷（トラウマ）となり、結局、大人へと成熟出來ずに歳を重ねてしまいかねない。

事實、このような善良？なキリスト者がおおいでになる。そのような人は、ときとして頑迷で、一途で怖いものしらず、そして微妙な美的感覺が欠けており、教条的・原理主義的自我の枠から開放されていないように感じる。したがつて、こういうお方は、ああでもなく、こうでもない。しかしこうでもあり、ああでもある。といった物事の多義的な深さの視点に立つて落ちついて考え、語り合うことができない。一義的な生の狹隘きょうがいの人となる。

さて、自我の問題はどこにあるのか。個人的な一般論としてみると、それは自我意識をその者の生に於いて、どのように位置づけるかにあるのではないだろうか。

「私は私である」というのが一般に自我意識だと思ふ。しかし、それは自我意識の一面である。もしそれが自我意識のすべてだとすれば、次のような自我意識となる。即ち「私は、私によって私である」また、「私は、私以外の私では絶対でない私である」と。これはまことに強烈な自我意識であり、強烈な自尊心である。強烈な排他的独善意識である。徹底した自己肯定の自我意識、自我主張である。このような自我意識を「歪んだ自我」という。「歪む」とは、本来の形が崩れている姿のことであり、本来の自然に属する自我が崩れているということである。

「『人間』という語は、昔『社会』という意味であつた」という文章を、青年時代に和辻哲朗氏の「人間の学としての倫理学」という書物で読んだことがある。たしかに「社会」とは人と人との間（関わり）に現成してくるものである。

つまり、「社会」があつて、人間がその場に入るのではなく、人と人とが相互に関わるそこに「社会」が現成するのである。これが人間が存在する基本的なことである。だから世界の成り立ちについて「はじめに関係があつた」と言われるのだ。

ここで先に語つたことの再確認をしておこう。

「私は私である」「私は、私によって私である」「私は私以外の私ではない」という自我意識は、自我の一面であつて、自我の全てではない。そのような自我意識をもった人間の集まりの場は必然的に、自我と自我とのぶつかり合いの修羅場となる。したがって、その場からは、平安で幸いな家族も家庭も社会も国家も世界も決して生まれては来ない。このような自我は「歪んだ自我」、つまり、本来の自我が歪んでしまった自我である。

では、本来の自我つまり生の本来の、「真つ当な自我」とは何か。ということを知る前に、「歪んだ自我」についても少し見つけてみようと思う。

歪んだ自我は徹底して自我主張をする。そのためには、自我は自我自身を脅かす一切を悪と決めつけ排除し否定する。外部に対しては勿論、自我自体を根本から揺るがす自然な本来の内的生の促しに対して否定的になる。というより抑圧して自分の無意識の暗闇の中へ埋めてしまい、自分は正しいのだと自我の正当性を主張する。

しかし、こうした歪んだ自我の醜悪さは、自分にとってマイナスの価値と認めて無意識の暗闇に埋め込んだ「それ(影)」を、他人の中に見いだして、その他人を徹底的に攻撃することで、自分の内なる不自然な不安を正当化して、悪いのは「あいつ」で「わたしは」正しい、と自己防衛をはたすのである。これが「歪んだ自我の醜悪さ」である。このような自我の働きをユングは「投影」と言った。

このようなことは、世間では日常的に行われているが、最近、私の目前で起こった個人の言動は、典型的なそれであり、とても衝撃的で印象深い一例であった。勿論、当人は、投影的行為を、自覚しておいではならず、固く自分の正当性を確信し、ますます相手を批判し否定することに正義感をお持ちになつておられるだろう。と自省しながら思いめぐらしている。

それはともかく、先に紹介した福音書の出来事の一つを例として取り上げるなら、例えば、ユダヤ教最大の預言者モーセーを通して与えられた律法を唯一絶対の神の言葉と信じ、その文字を遵守する生き方、即ちユダヤ教律法主義的信仰の問題性をイエスは信仰の根源から鋭く指摘した。しかし、ユダヤ教団と祭司たちは、そのイエスを神に対する悪魔的な逆行行為とみなしイエスの弟子イスカリオテのユダを金であやつり、彼の先導で真夜中にイエス達の居場所を急襲しイエスを逮捕した。そしてローマ軍の手で、神の名（権威）によつて十字架刑でイエスを惨殺した。イエスがそのとき、最後に残された言葉は「彼らが、自分が何をしているのか気づいていません、神よ、彼らをおゆるしく下さい」であり、その言葉が証示する内容はとても深い。

「歪んだ自我」の「歪み」の特徴の一つは、自我を中心にして身の回りの者を善悪の一義的価値で決めつけるところにある。つまり自分と同じであれば味方であり善であり、自分と異なれば敵であり悪とする、所謂、自我と同じ価値体系の内にあるものだけを善とし仲間として認める自己同一性に強固に生きている。その生きかたを先に、独善的、排他的、自尊的などと言った。まさに、イエス当時のユダヤ教の律法（聖書文字）主義宗教は、その典型であつたと言える。（主

義主張に生きる人にこのタイプが多いようである)

だからこそ、彼らは、自分たちと異なるイエスの神理解や信仰理解、宗教理解は悪であり敵であり、自分たちの神の名によって必ず抹殺しなければならぬ「悪」又は「悪魔」だったのである。

これは、「歪んだ自我」による信仰がもたらす彼らの必然的な帰結であり、したがって彼らは、自分たちは正しいことを行つたと確信しているのである。その意味で「歪んだ自我」は極めて一面的な価値判断しか出来ないのである。その独善と排他と一面的な価値判断しかできない自我の歪みに「気づいていない」とイエスは哀かなしまれたのである。

それにしても、イエス当時、ユダヤ教団と祭司たちは、イエスの痛烈な批判に不安を覚えていたのではないだろうか。

当時、律法を遵守して生きる余裕があつたのは、人口の一〇パーセントの特権階級の人々だけだつたと言われている。そして、祭司達は律法を守れない多くの人々を「アム・ハアールツ（塵の民）」と呼び軽蔑けいべつしたのである。その意味で、人々（民衆）は宗教人としての祭司達から遊離していた。しかし、祭司の中にも、自分たちのあり方に不安を覚えている者達がいたようである。例えば、イエスのもとへ夜密かに訪ね、教えを求めたユダヤ教の教師ニコデモなど、その代表的なひとりであろう。また民衆たちの多くはイエスを敬愛し、イエスの話に耳を傾けた。ある人達

の多くはイエスの後を追い、ときに、食事することをも忘れる程であった。その理由はどこにあったのだろうか。

福音書はイエスについて次のように記している。

「人々はイエスの教えに非常に驚いた。律法学者（ユダヤ教の教師）のようにではなく、権威を身につけている者としてお教えになったからである」（マルコ福音書一章二二節）

当時のユダヤ教のセンセイは、上述のとおり、聖書の文字を即神の言葉として遵守する生活を最も大切な事として教えた。そして、その聖書の文字の最も正しい解釈者が律法学者であり、その解釈に基づいて、人々の日々の生活を指導し祭儀を行うのが祭司だったのである。

ユダヤ教の祭司センセイたちは、体制化したユダヤ教で人々を聖書の文字と祭儀で日々の生活を縛り閉じ込めようとしたのである。おえらい、祭司サマたちの教えは、極めて教条的原理主義的であって、人々（民衆）の、生の現場と内面へは届くことはなかった。

しかし、イエスは、天の父ちゃん（神）の愛と恵みの働きが、どの人にも及び、生かされているのが「あなたなのだ！」と、ひとり一人に語りかけた。そしてご自分の手と足と眼差しとで直接、且つ具体的に、その事実を証示なされたのである。それは、人々に平安と生きる勇氣と希望とに与らしめると同時に、一切の束縛からの開放であった。

事実、人々はイエスに接して「非常に驚いた」とあるが、この「驚く」とは、「喜びで仰天ぎょうてん

する」という意味である。そしてこのようなイエスを、ユダヤ教のセンセイのようではなく、「權威を身につけた者のよう」と直観した。その意味は「何にも縛られ限定されず、本当の命の開け（自然）に生きている者」という意味を含んでいる。

いったい人々はイエスを何を見たのだろうか。皆さんはどのように思われるだろうか。この一点はとても大切なことだと思う。

人々がイエスに接してびっくりぎょうてんし「何ものにも縛られず、本当の命の開けに生きている者のように」感じたそれを一口に言えば「天然自然のように」ということ、即ち、「天（神）の然りを自ら然ること」、つまり、「自我を超えた神の働きを素直に行じている者のように」ということである。

自我は自分勝手な善悪の価値を作り、その価値体系に捕らわれて自分の生の在り方を自縛する。その意味で自我からの発想は必ず「不自然さ」がともなう。不自然さは自我の力みであり、自我のつっぱりであり、原初的な命の促しの生―創造に於ける人間の自然的生の内容―から逸脱した在り方である。そこに於ける生には真の平安はない。

イエス当時のユダヤ教の律法（聖書）主義、特に熱烈律法文字遵守主義者のファリサイ派の信仰者達は、結局、神のご意志に生きると言いながら、自我の価値体系を律法（聖書）の文字に

読み込み、それを神の御意志だと信ずる決定的な思い違いを犯してしまった。これについて、使徒パウロは、以前フアリサイ派の中のフアリサイ人と自認していた頃の自分を思い出しながら、次のようにその宗教信仰の誤りを指摘している。

「私は彼らが救われること（本当の命に目覚めること）を願ひ、彼らのために祈っています。私は彼らが熱心に神に仕えていることを証しますが、この熱心さは、正しい認識に基づくものではありません。なぜなら、神の義を知らず、自分の義を求めようとして、神の義に従わなかったからです」（ローマの信徒への手紙一〇章一節〜三節）

結局、ここで言う「不自然さ」とは、自我が生み出す価値体系（自分の義）であり、一方「自然さ」とは、自我を超えた神の創造的な大いなる命の開け（神の義）のことである。

とすると、「不自然さ・歪んだ自我」を（１）とし、「自然さ・自我を超えた神のはたらき」を（２）とすれば、（１）と（２）とは対立関係ではなく、（２）が（１）を包み（１）が（２）に抱えられている関係なのである。これをイエスの、パウロ的な発言をすれば（１）は（２）の内にあり、（２）は（１）の主体として働いている関係なのであると言える。この事については別項で述べるので、ここではこの項にしたがって以下進めることにする。

先に、イエス当時のユダヤ教のセンセイ達の中には、自分達の律法主義的求道に不安と葛藤かつとう、

つまり、不自然さを感じている人達がいるのではないか、とニコデモを例にして述べたが、その不自然さに気づき、自我を超えて自我を生かす神の大きい命のはたらきを経験し、自覚開眼、回心したのがパウロであった。そのときの経験と自覚の生の内容を彼は次のように告白した。

「生きているのは、もはやわたしではありません。キリスト（自我を超えて自我を生かす大いなる命のはたらき）がわたしの内に生きて（はたらいて）おられる」（ガラテヤの信徒への手紙二章二〇節）

「わたしにとって、生きるとは、キリスト（大いなる命のはたらき）である」（フィリピの信徒への手紙一章二一節）

しかし、多くの自我同一化した者は、自我が構築した価値体系に一瞬それが不自然ではないかと感じたとしても「自分は決してそのような悪人ではない！」と固く思い込み、それだからこそ余計に、不自然ではないかと感じたそれを排除し、自分の無意識の中へ投げ込むことで自我の正当性を合理化し、安心する。だが、それだけではおさまらず、無意識の中に投げ込み隠した不安をもたらしそれ（影）を、他者の誰かに投影して―イエス当時のユダヤ教団や祭司達はイエスの言動に投影して―徹底的に攻撃する。その攻撃の凄まじさは、イエスの場合、十字架刑での惨殺だった。これこそが「歪んだ自我」の恐るべき現実である。

結局、先にパウロが語ったとおり新約聖書に登場するユダヤ教のセンセイ達の宗教や信仰は

(本来のユダヤ教という宗教がどのようなものであるかはともかく) 所詮は「歪んだ自我」が生み出した虚構だったと言える。イエスは当時のユダヤ教のセンセイ達に、この一点を見抜き、彼らの信仰や宗教に根源的な命の欠落を厳しく指摘された。

「禍いだ、お前たち律法学者とファリサイ人よ、偽善者どもよ。お前たちは、人々の前で天国〔の扉を鍵で〕閉じてしまうのだ。お前たちは自ら入ることをせず、入ろうとする者達をも入らせない。」

「禍いだ、お前たち律法学者とファリサイ人よ、偽善者どもよ。お前たちは海と大陸を駆けめぐって、一人でも改宗者を作ろうとする。そしてうまく行った時は、彼をお前達に倍するほどの地獄の子にしてしまう。」

「禍いだ、お前たち盲目の道案内人よ。……愚か者どもよ、……蛇よ、まむしの裔すえよ……偽善者どもよ。……」(マタイによる福音書二三章一三節以下参照)

イエスが言う「禍わざわいいだ!」とは、「ああなんと悲しいことよ!」「ああなんと可哀そうなことよ!」という意味の言葉であって、単なる攻撃だけの言葉ではない。

彼らの熱心な求道心や信仰心は、パウロ的に言えば「神の義(神のご意志)」を知らず単に

「自分の義（自我中心）」から出たものに過ぎない。つまり、彼らの最大の誤りは、神の本当のはたらきに心身で閉眼し、自覚しないまま、律法（聖書）の文字に忠実に生きることをもって「神を知った」と自我の価値基準で判断したところにある。つまり、彼らは律法（聖書）が証示する命のリアリティーを経験し自覚しないまま、律法（聖書）の文字を神の言葉と同一化して、絶対化したその文字を信仰的生の出発点とした。それはまさしく、自我の価値判断による価値基準の設定に他ならない。だからイエスは、次のように指摘なされた。

「あなたたちは、聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが聖書は、わたし（大いなる命のたぎり・はたらき）について証示をしているものだ。それなのに、あなたがたは、真の命に与るためにわたしのところへは来ようとしなない。」（ヨハネによる福音書五章三九節以下）

パウロも次のように言う。「（聖書・律法）の文字（の自我による絶対化）は人を殺しますが、霊（自我を超えた大いなる命のはたらき）は（人を生死を超えた命に開眼させ）生かす。」（コリントの信徒への手紙Ⅱ三章六節）

このような「律法主義・原理主義」的生き方から開放される為には、歪んだ自我意識の向こう側に、自我意識をまる抱えして、はじめからたぎりつづけている大いなる命の世界の開けのリアリティーに閉眼する経験と自覚を体得することである。この自覚へ導くのは自我の努力ではなく「聖霊のはたらき」、つまり、大いなる命の開け、たぎり、はたらきにより、自我の絶対化を徹

底的に相對化（無化）せしめられ、大いなる命の開けに開放させられる経験だけである。このような経験と自覚にあずかったエックハルトは、次のように告白した。

（自我をもって）「神について一切、口を開くな。神について語るならば、それは虚言である。自我をもって神について語れば語るほど、神から離れる」（「エックハルト」——上田閑照——）

エックハルトが、この一言で何を証示しようとしたのか、私なりにハッキリと見えてくる。しかし、当時のローマ・カトリック教会は、その絶大な世俗的組織と権力により、彼を異端者として破門した。所詮、「歪んだ自我意識」から生み出された「宗教」と同じである。この程度のもののである。それは、イエスを悪魔の頭として惨殺した「宗教」と同じである。このような「宗教」の流れは、現在も基本的には少しもその体質は変わっていない、と感ずるのだが、皆さんはどのように思われるだろうか。

意識的な自我の働きなくして人は人としては生きられない。だから軽々に「自我を否定しなさい」などと、言ってはならず、また、そのように軽々に「自我」を悪者呼ばわりする者は、当人の自我が成熟していない者である、と先に述べた。

意識的な自我は様々な仮面をかぶり、神や天使、そして悪魔にもなる。つまり、自我中心を貫徹するためには何にでも変身するのだ。神や天使になつて人を欺き一儲けする宗教や宗教家」と称するのがこの世には大小合わせて無数に闊歩している。この場合、本当に問題なのは、その自我の仮面が偽りであることを知って、人を欺く者ではなく、その自我の仮面を本当の自分であると信じている、否、むしろ、それは世のため人のため、勿論、神の栄光のためで、と思ひ込み

疑うことなく、ただの教条を熱心に説き生きている者、この者こそ、厄介者なのである。

わたしは教典（聖書等）を学び、教えを忠実に守り、礼拝を行い、慈愛を行じ、日々誠実に生きています。という場合その自分の生き方に、自分では知らないままに陶醉するナルシストになつてないか、ということである。自我は、このような思いもつかぬ技を仕かけ、人を偽善の穴に陥める。このような落とし穴に落ち込む人の或る人達は、自我が充分に成熟していない観念的な理想主義者に多いように思う。これが「歪んだ自我」の実態である。

では、自我が成熟する、とはどういうことなのか。それは、自我を超え包む大いなる命のたぎり（はたらき）に開眼すること、自我の限界を経験し、自覚することである。そのとき、自我は相対化される。この状況がある人は「限界点即自由」と言い、ある人は「虚空／世界」などと、少し難しい言い表しをなさるが、それを、ひとつの例で言うなら、次のような事ではないだろうか。例えば、柿の木に柿の実がなり、その実が成熟してゆく場合、その柿の実が成熟しきつたとき、その実はやがて、枝から離れ、大地に落ちるだろう。そして、大地に落ちた（死んだ）柿の実は、頽れ大地に溶け込み、大地の命に育まれて芽を出し、成長して行く。まさに「成熟する」とは、柿の実は限界に於いて大地に全存在を投げ出すことによつて、新しく芽を出す事なのである。柿の実が、いつまでも枝に留まり、その柿の実であろうとするなら、その柿は新しい命に芽ぶくことは出来ない。

自我が成熟し切る、という事は、自我を大地である大いなる開けの世界、創造的な大いなる命

のはたらきの世界・場。すべてを包み育む創造的な大いなる命の場・世界に投げ込み、自我を超えた虚空（底無しの無限の開け）の大いなる命がたぎるはたらきの中へ死に、溶け込み、新しい命として芽を出させていただくことである。その意味で、「限界点即自由」とは、まことに的確な表現だと言える。また、「虚空／世界」という表現も、この世（世界内）に生きる人間の本来的な在り方を表言している。また同じことを、他の方は「自己／自我」と言う。さらに「絶対矛盾的自己同一」「超個の個」「対立の一致」などと、それぞれが真摯に且つ厳密に求道することで開眼した人間の実存のリアリティーを、その人自身の整った言葉で表し（命題化）た。その意味で、それらは決して難しいただの理屈ではない。

ちなみに、私はわたしの器量で、「創造に於ける人間の自然」「真つ当な自我」などと称している。

イエスはこの間の消息を次のように証示された。

「一粒の麦は、地に落ち、溶け込み、死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」（ヨハネによる福音書一二章二四節）

このイエスの証示は深く重たい。

なお、ここで思い出すのは、道元の次のような提唱である。

「ただ我が身をも心をも放ち<sup>はな</sup>忘れて、仏（大いなる命）の家に投げ入れて、仏（大いなる命）

の方かたより行われ、これにしたがい持もてゆくとき、力をも入れず、心をもついやさずして、生死しよじをはなれ、仏（大いなる命）となる。たれの人か、心（自我）に執着しているものがあるうか。」  
（正法眼藏・生死の巻）

自我の限界を経験し自覚しないままで、神や信仰、罪や救い等の「宗教の教義」を振りかざしても、それは所詮、自我意識内の観念的で独善的な信仰・宗教であり、自我意識が作り出す幻想にしがみついているだけのこととなる。そのような「宗教信仰」には眞の平安あずかに与あることはない。（マタイによる福音書七章二一節〜二三節参照）

だから、イエスは「自分の持ちものを一切捨て切つてないならば、あなたがたの誰一人としてわたしの弟子ではありえない（わたしが与える命に開眼出来ない）」と言われた。（ルカによる福音書一四章三三節）

ここで「一切捨てきる」とは「完全に別れを告げる」という意味である。また「自分の持ちもの」とは、「自我から発想する自分」のことであり、その自我意識に生きる自分に「完全に別れを告げなさい」と、イエスは証示されたのである。このイエスの証示を注解するかのようにエツクハルトは次のように語る。

「自分の財産（物・行い）をどれほど他者に施し、捨てたとしても、その人が自分自身（歪んだ自我）を保持しているなら、その人は何も捨ててはいないのである。」

この項の主題は「真つ当な自我・歪んだ自我」とは何か、と言うことであるが、結局「歪んだ自我」とは、「私は私によつて私である」という自己同一に留まり、その「私」を絶体化し、他を排除し、独善を貫徹する生き方、有り方の自我のことである。一方「真つ当な自我」とは、「私は私を超えた大いなる命によつて私以外のものとの関わりに於いて私として有らしめられている私である」という事態であり、歪んだ自我の自己同一性が破られ、超えられ、相対化させられ、超個の個を自覚した自我のことである。

その意味で「歪んだ自我」の在り方は極めて不自然であるばかりか、そのような独善的で排他的な生き方、有り方の個は現実の世界にはどこにも存在しない。この世の全ての個は、他との関わりに於いて個としてあり得るよう超越的な定めにある。この存在の秘儀に開眼し自覚している個（自我）が「真つ当な自我」の在り方、生き方、したがつてそれは極めて自然で現実的な生（存在）の内容なのである。重ねて言うなら、「真つ当な自我」とは、「自我」を超えて働く大いなる命の開けに開眼するとき同時に現成する自我なのである。

しかし、私達の日常の在り方、生き方からは、「自我」を超えて働く大いなる命の開けは隠されて見えない。見えるのは「歪んだ自我の様態」だけである。つまり、自我を基盤にしたさまざまな人の計らい―科学、思想、政治、倫理、経済……そして「宗教」までもが排他的独善と化して互いに自己の眞理性を主張して争っている。しかし彼らは、それが「歪んだ自我」から起因し

ていることに気づこうとしない。なぜなら、彼らは自我を超えて全てを包む大いなる命の開けの靈的リアリティーを経験し自覚してないからである。つまり、自分の全存在を支え包みはたらく大いなる命に目覚めた「目」を持っていない、ということである。

だから、イエスは証示して言われた。

「身体の灯火は目である。もし、あなたの目が真つ当なら、あなたの全体は輝いているであろう。しかし、あなたの目が歪んでいれば、あなたの身体全体が暗闇であろう。そこでもし、あなたの中の光が闇であれば、その闇はどれほどであろうか—ああなたと恐ろしく哀しいことよ！—」（マタイによる福音書六章二二、二三節）

大いなる命のはたらきの開けのリアリティーこそ、靈的、かつ宗教的なるものなのに、それに開眼し自覚していないなら、それは、ただの世俗的な歪んだ自我が生み出した宗教風の幻想と虚構の闇にさまよっているだけになるのではないだろうか。

イエスは当時のユダヤ教団とその祭司達の宗教体制に組織維持、権力維持のためだけに走る宗教の偽善を見抜いておられた。だからこそ、終生神のみ旨を語りつづけ、最後に殉教した預言者イザヤの叫びを、イエスは彼らに投げつけられた。

お前たちはいくら聞いても、悟らない。また、見るには見るが、認めない。

なぜなら、この民の心は鈍感になった。そして彼らの耳は遠くなった。

また、彼らは自分たちの目を閉じてしまった。その結果、彼らは目で見ることなく、耳で聞くこともなく、心で悟ることもなく、立ち帰るといふこともなくなり、また私が彼らを癒すこともなくなるのではないだろうか。

(マタイによる福音書一三章一四節〜一五節)

いつの時代にも「宗教や信仰とその集団」は、存在の芯しん、人間の芯、宗教や信仰の芯を見失つたまま、目に見える教義やこの世の事態に振りまわされ、それを追い、保持し、固執すること、自らを暗闇に陥ち込んでしまう危険性と同伴していることを忘れてはならないと思う。そこにあるのは「力みと不安と争い」だけで、「平安」はない。なぜなら、彼らは「徹底した放下（捨てること）の平安」を知らないからである。

### ★追記

この文章は、去る六月十二日に開催された「一日あごらの集い」のときに、用いたテキストのつづきの一部として記したものです。

なお、この文章の続きと合わせて、来る一〇月一〇日〜一日に開催される第十三回「あごらの集い」のテキスト冊子として完成する予定です。

## あとがき

このような小さな冊子。すでに、前書きが記されてあるのに、いまさら「あとがき」など？と思いますが、一言 記させていただきます。

現代という時代は、すべての面で歴史的な一大転換期にあるように思います。キリスト教もその例外ではありません。

歴史的な転換期に生きる者は、来るべき新しき時代のための生みの苦しみをそれぞれがさまざまな形、つまり、不安や懐疑、期待や苦悩、虚無や希望その他さまざまな形で、それとなく自分の内に感じながら生きています。キリスト教に関わる者たちもその例外ではありません。

私自身も一人のキリスト者として、この時代の一大転換期に生かされていることに、私なりに不思議と有り難さを覚え、「こんなおもしろいことはない」と、こころ踊らせております。

せつかくこのような時代に生かされておきながら、その時代の激動の直中に身を置かないのは、とてももったいない、つまり、従来の伝統的な教条にしがみつくことで安心して生きる生き方はもったいない、と思っっているのです。大いに惑い、疑い、少しは苦悩し、この激動が意図し、生

み出そうとしているコトは何なのだろうか、と私なりに信仰の器量で見極めたい、と興味深々に日々を生きているのです。その意味で、まさに「求道悦楽」しています。

それにしても、そのような生き方が出来る場に自分が置かれていることの有り難さ、またそれを求め語り合い分かち合う事が出来る友達を得ているありがたさを、深く深く感謝しています。勿論、そのために必要な食べ物、住むところ、少しではあっても経済的な必要を得られてきたこと、特に私の求道を共にしてくれた家族（妻子）に感謝したいと思っています。

この度の、「あごら誌四号」に投稿してくださった教友らのエッセイを拝読し、その内容に心底していることは、現代の一大転換の激動そのコトを通して超越者（神）が証示している語りかけと促しを、それぞれの形と器量とで真摯に受け留めて、それなりに応えようとしておられる求道のお姿を感じました。有り難うございます。

私たちの「あごらの集い」は、伝統的なキリスト教会の教義に基づく信仰をもって是とするのではなく、伝統的なそれを突き抜けて、伝統的な信仰を生み出した大いなる命（非閉鎖的で未完結的な大いなる命の開け）を、現代の激動の中でしっかりと経験し自覚的に受け取り、聞き取りなおす時（チャンス）としたいのです。

最後になりましたが、この度も、あごら誌の印字を惜しむことなくしてくださいました小野恵

子姉に深く感謝します。また、ご多用の中、お世話係としてご奉仕してくださいました平井浩兄にも深く感謝いたします。

合掌

二〇一〇年九月二五日

松下 昌義